

議事の経過

発言者	議題・発言内容・決定事項等
事務局	<p>○開会のことば</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 委員長選出 2 委員長挨拶 <p>～以下、公開～</p> <ol style="list-style-type: none"> 3 調査・検討（進行 委員長） <p>（1）上尾市の不登校の現状・課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育センター担当から説明 ※資料1・2参照
小林委員長	<p><長期欠席の中の「病気」の項目について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・例年と比較してどうなのか。 ・欠席の質を見ていく必要がある。感染不安とその他など、カウントを整理しておくべき。 ・長期欠席を分析する時、病気を見る。病気という以上、診断名がつくべきである。 ・病気であるならば、教育委員会は学校に確認をする必要がある。学校に問うことで、学校が児童生徒を気に掛けることにつながる。教育委員会が学校に尋ね、学校が児童生徒に働きかけることが大事。 ・大阪は病気が多い。考え方にもよるが。 ・上尾市の病気は多すぎるのではないか。病気だと医療の問題となり、教育から離れる。「手が出せない」となってしまうかねないが、不登校であれば、教育の問題として、教師が取り組むことができる。 ・病気で休んでいる間に学校はどう対応しているのか。
小林委員長	<p><欠席数について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・30日未満の児童生徒の欠席日数も確認する。欠席日数を確認しておくことで、先生の取組の評価にもなる。欠席数「31→29」（長期欠席数減） 欠席数「200→150」（長期欠席数不変） どちらの取組がより効果的だったと見るべきか。 ・欠席日数にこだわる（敏感になる）べき。欠席に対して、どのように先生が声をかけるか。 休んでどんな様子だったか、何をしていたのかと気にかけていることを伝える。

	<ul style="list-style-type: none"> ・報告書類等は不要。データをとると先生方の取組状況が見えてくる。 ・上尾市は、月7日欠席で報告としている。 熊谷は3日だった。不登校になる数ヶ月前から3日欠席が見られるという調査結果から決定していた。何かをするときは根拠をもつことが大事である。
小林委員長	<p><不登校対策チームについて></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「チーム」はその子と関わる大人で組む。小さいチームが同時に動いていく体制がよい。 ・そのチームを見て、情報共有するための中核となる人物（コーディネーター）が必要。 ・確認はインタビュー形式がよい（会議を増やさない工夫として） ・校務分掌的に動くと、形式的な会議なる。情報共有をメインに考える。
青木委員	<ul style="list-style-type: none"> ・本校は、生徒指導部会が常設。ケース会議はその都度、短時間で行っている。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・大事なことは、その子に何をするか。その親に何をするのか。 ・5人参加の会議なら、一人3つ案を事前に考える。会議で出す。優先順位を付けて、1番必要なものだけやる。これなら短時間でできる。
石井英委員	<p><児童生徒や保護者相談しやすい学校について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者の立場から話をする。これまでの話は、子供たちや保護者が相談するから成り立つことである。 ・私は、PTAやおやじの会をなどで学校と関わりがあり、相談しやすいが、他の保護者も学校に相談しやすいことが必要だ。学校は、相談することについての敷居を低くすることが大切だ。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・その子の良いところ、成長したところを加えると保護者は学校の話を受容しやすくなる。 ・保護者と信頼関係が築けると相談しやすくなる。 ・子供の不登校は体の不調から始まることが多い。 ・その理由を尋ねる。その子と関わるチャンスと捉える。
遠藤委員	<ul style="list-style-type: none"> ・2年間で熱があれば早退、兄弟がコロナになると登校できないという状況になった。学校では、4月からコロナ対応を緩めたところがある。通常に戻りつつある。 ・問診票を用意して「心配なことはありますか」など○をつけさせ、それ

<p>村田委員</p>	<p>について書かせたり、質問したりして児童生徒の状況を把握している。</p> <p><教育センターにおける相談について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育センターの相談に関わって9年目。相談のべ件数が非常に増え、不登校に関する相談は2倍になった。 ・以前は落ち着きのなさや書字の苦手さなどについて中学生の相談が多かった。 ・この数年の相談は低年齢化し、特に不登校の要因がはっきりしないと答える児童生徒や保護者が増えてきている。 ・一斉休校等によって、「学校に行かない選択肢」が出てきた。 ・特別支援学級の子は、丁寧な関わりの中で、自己理解・自己受容などをしながら成長していく。 ・特性をもつ子が通常の学級で頑張った結果、疲れてしまうことがある。先生の熱心さが子供や保護者の負担となるケースもある。
<p>小林委員長</p>	<p><学校に必要とされるもの></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校に必要なのは、子供たちにとっての「居心地の良さ」である。楽しいとは違うものである。 ・教育活動の再開を急ぐと居心地の悪さが出てくる。 ・マスクなどで、表情の読み取りなどを学んでおらず、対人経験が乏しい。 ・小1であれば、年長、年中ぐらいの経験に相当する。 ・心のコントロール、折り合いをつけることが難しい。 ・病気を分析することは、そこに心理的要因が含まれる可能性がある。 ・教育として何ができるか。 ・アメリカの例、小学校1年生で集団に入れないと収入の減少につながったという報告がある。 ・子供にとって大事な時期にパンデミックに被災している。
<p>波瀾委員</p>	<p><現在の土尾市における相談・支援等の実態について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校に行けない子をみている。子供だけでなく、保護者も特性をもっている方が多い。 ・保護者を支え、つぶれないように配慮している。保護者の話を聞くことがメインの支援になっている家庭もある。
<p>石井太委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生活に困窮している家庭、母子家庭について。相談室に登校しているほとんどの生徒が医療的なサポートが必要。医療指示がある生徒に対する関わり方に不安がある。 ・保護者との関わりや支援についても知りたいところ。 ・相談室に関わる子はコロナ前からマスクをしている子が多かった。

小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・保健所との連携はどうか。
石井太委員	<ul style="list-style-type: none"> ・児童相談所はあるが、保健所はない。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・保健師に学校に入ってもらおう。生まれた時からの関わりから、支援につながる場合がある。
伊藤副委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・昔は、不登校となった場合は、家に一人でいる子が多かった。 ・今は、居場所がいろいろなところにある。選択肢が多い。 ・学校とは違う選択をする家庭も増えている。 ・昨年、中学校在籍時は全欠席だったが、高校生になり、登校できる生徒もいる。 ・卒業後の選択肢が広がっていることは、生徒にとって救い。 ・反面、迷いや難しさにつながることもある。選択の際に、学校も生徒に関わり、その延長に道が拓けるようにしたい。 ・学校も資料6ページのように段階的に、生徒に合った支援を継続して実施している。物理的に難しい面はあるが、できる限りで実現していく。やはり人員不足は否めない。スタッフがほしい。
吉永委員	<p><関係機関との連携について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料7、8ページ関係機関との連携をもう少し充実し、使いやすくする。活用につなげられるようにすべき。 ・不登校対策の最終目標は社会的な自立、自立支援である。 ・高校卒業をできない生徒にも自立支援をしたい。
池田委員	<ul style="list-style-type: none"> ・経験不足に関連して、小1が落ち着かず大変そうである。 ・私自身も昨年度と同じ学年だが、今までと感覚が違う。 ・昨年度、突然、不登校になった子がいた。体の不調等に気付けなかった。不登校の原因が定かではない。急に不登校になる子について、体の不調以外に傾向があれば教えてほしい。
小林委員長	<p><コロナ禍における学校の活動再開時のペース配分について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校の居心地の良さと前年度の欠席日数で、おおよその予測ができる。 ・「楽しい」ではなく「居心地の良さ」である。この感覚が高い子は出席率が高い。 ・緊張感が少なく、子供の安心を確保することが大事である。 ・コロナからの活動再開をゆっくりとすることは、過度な緊張を与えないことでもある。緊張させた後には、ほぐす時間や活動を確保する。

事務局	<p>(2) 上尾市不登校対策基本方針の検討 担当から説明 ※ 資料3参照</p>
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的な考え方としては、児童生徒の社会的自立を目指すことである。自立支援を誰が、どこで、どのように行うのか。 ・ 就労でつまずくと引きこもりになりやすい。 ・ 教育機会確保法は素晴らしいが、単純に不登校対策に落とし込めない。 ・ 特に「相当の期間」という文言について精査が必要である。この表記だと、一定の間継続しているという印象になる。しかし、実際は断続的になることもある。もう一度、定義を確認し、調整すべきである。 ・ 学校に行けない理由を明確に客観的にすることが対策につながる。 ・ 理由をどのように分類し、どれに対応すべきか判断し、対応すべきか。そのために、病気による欠席の詳細、感染不安などを分析する必要がある。 ・ 無気力には、どのように対応するのか、病気ならどう対応するか。 ・ 子供たちが話をする気力を失っている（面倒になっている）。 ・ 抑うつともとらえられる。この場合は対応が他とは異なってくるはず。状況が変われば、更新していくものでもある。
小林委員長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本方針の柱はこれでよいか。
各委員	承認
事務局	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次回は、今回の柱をもとに基本方針の内容について、協議をお願いします。学校や関係機関等、今回同様にそれぞれの視点から、御意見いただきたいと思います。本日はありがとうございました。 <p>4 諸連絡 第2回の会議の日程等の確認</p> <p>○閉会のことば</p>